法少女リリカルなのは - The Spirit of Eternity Sword -

兼真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは －ＴｈｅＳｐｉｒｉｔｏｆＥｔｅｒｎｉｔｙＳｗｏｒｄ－

【Ｎコード】
Ｎ７８５３Ｎ

【作者名】
兼真

【あらすじ】
死神のミスにより死んでしまった主人公。
ミスの責任を取るという形で創造神にリリカルなのはの世界に転生させて貰う事に。
当然の如くチート能力を貰うだけじゃなく、何と永遠神剣と契約を結ぶ事に！！
オリ主、原作ブレイクでお送りするリリカルなのは二次創作小説です。

注：この作品は独自設定、解釈やご都合主義満載です。
作者は初心者ですので指摘、感想をいただけたら幸いです。

プロローグの序章

ここは死神科書類監査部の一室。
その部屋の中央に魔方陣が展開されそこから突如一人の女性が現れる。

『すまない大至急確認したい事がある！　この青年の死に関する書類を担当しているのは誰だ？』

その女性が空中に小型のスクリーンを展開するとある青年のプロフィールが表示される

『えっ！　創造神様っ！！　あっあのどうしてこの様な所へ！？
何かございましたか！？』

予想外の人物の突然の登場に全身を黒で統一したスーツを着た女性が慌てて駆け寄る。
バッチ等を見るに部長の様である。

『ああ、君か。悪いけど大至急、この青年の死の書類を担当している者に会い確認したい事がある』

とスクリーンを黒い女性に見せる。

『えーとこの青年ですか…あの、この青年は確か創造神様が死後一度お会いになりたいと仰っていた人ですよね？』

『ああ、そうだね。良く覚えていたね』

『はい、創造神様が会いたいと言う人物だったので私の担当に回して貰ったんです』

『君の？』

『はい。間違いなく私の担当範囲の人です。…あの何かあったのでしょうか？』

『彼の寿命はまだ先だったはずだね？』

そう云われて黒い女性は考え込む。

『えーと…はい、私の記憶している限りではそうなっていますね』

『いつもの様に世界を見守っていたわけだが……実は、彼が死んだ…交通事故に巻き込まれてね』

『えっ？　…本当ですか…いえ、でもっ！』

黒い女性はそんなはずは無いと言う反応を見せる。

しかし創造神程の者が嘘を言うはずもなく…

『だから書類を確認させて欲しいんだどうなっているのかをね』

『そうですね…少々お待ちください』

黒い女性が手を開くとそこに一冊のファイルが現れる、そしてその中から件の書類を見つける。

『あの、こちらです』

『確認しよう……これは…何てことだ』

その反応に黒い女性も書類を覗き込むと…

『そんな、こんな事って…嘘』

黒い女性にとって本来ありえてはいけない事なので、あまりの事に言葉を失ってしまう。

『……前代未聞と云う事態だね』

人の死と言うのは人が生まれた時、死を管理統括する神、死神が決める。
それに従い個人の死に関する書類が作成される。
とはいえその枚数は膨大な数に及ぶため、書類ミスがそれなりに存在する。
そして平均的な寿命を決められた者は数年単位で書類にチェックが入り修正が行われる。

そのチェック、修正をするのがこの死神科書類監査部の役割である。
書類には優先度があり当然寿命の短い者からチェックされていくその為今まで
書類ミスは有れど、ミスのまま死んでしまうと言う事態は起きていなかった。

しかし今回そのミスが発生してしまい。一人の青年が死亡してしまったのである。

プロローグ?〜覚醒と邂逅〜

『ここは何処だ?』

気が付いて辺りを見回してみると見覚えのない場所に居た。

いや何処かで見た事がある気もするな…脳内検索中…

そうだ!ここは永遠のアセリアに出て来る［時の迷宮］に似ている気がする。

…って何でさ?、そんな場所に俺が居るんだ??

『夢か?　いやでも意識が覚醒している自覚はあるしな』

ともかく現状に至るまでの記憶を整理してみるか……考察中…

…変だな。今日に限っての記憶が曖昧で違和感がある。

『う〜、変な感じだな、気持ちが悪い』

『どうやら無事意識が覚醒したようだね』

背後から女性の声が?

『誰だ!?』

と声がした方を振り返ると

『やぁ初めまして。私は神様と云った所かな』

『……』

思わず見惚れてしまった。
女性の外見は一言で云うなら聖なるかなの斑鳩沙月の神剣解放状態の姿で
髪の毛も含め全身を純白で統一した感じになっている。
蒼穹を思わせる綺麗な瞳に思わず吸い込まれそうになった。

最も細部は異なりスカートの部分は足元までのロングだし、肩の部分のアーマーは両方に。
両手には手袋、足はブーツ状の靴、肌が露出しているのは頭部以外は無い。
何より中身の女性の美人度はそれ以上だと思う。
体型は服の上からでもバランスが取れている事が一目でわかる。
これで見惚れるなって云うの無理！！

『どうかしたのかい？』

『ハッ！あっす、すいません、えーと神様…ですか』

神様か…確かに神秘的な雰囲気や
とてつもない存在感を放っているし
やっぱり居るんだな神様って。

『ああ、そうなるかな。正確には創造神だけれどね』

『創造神！！？…何でさ？？』
いきなり凄い人？　がきたな

『どうやら、判らない事だらけ、と云った感じかな？』

『…そうですね。正直な所』

『ふむ、ならまず要点を簡潔に話すとしようかな』

『お願いします』

『まず私は君達の概念で云う所の神であり、創造神と云う立場にある。
そしてこの場所はある目的のため私が創り出した特殊な空間になる。
次に君だが交通事故に遭い死んだ状態にある。
だが君は本来は死ぬべきではなかったし特殊な立場にあるので、
別の世界で転生して貰うために私の元へ魂を呼び寄せた。
と云うのが現状に至るまでの流れだね』

『俺が……死んだ？』
…嘘だろ？

『そう、死んでしまった、と云う自覚が無いのはその辺りの記憶を私が封じたからだね』

『何故？』

『死に至る記憶、特に君が遭ったような事故の場合、その記憶だけで多大なショックを受けるからね、危険と判断したのさ』

『…そんなに酷い事故だったんですか？』

『ああ、居眠り運転が原因で１５０Ｋ超えの猛スピードの大型トラックに轢かれそうになっている女の子を庇って、そのトラックと激突したからね』

『うわぁ…』

確かにそんなの覚えてなくて正解かもな。

『でも本来死ぬべきでは、って事は俺も助かって居たって事ですか？』

『いや、そもそも君があの事故に介入すること自体想定外の事だったしね』

『は？』

今、何と？

『実際に君が庇わずともその女の子は、命だけは助かっていたんだけどね』

『・・・・・・えっ、て云う事は俺は無駄死に？』

ナンテコッタイ！！　俺の馬鹿・・・ｏｒｚ

・・・ん？命だけ？？

『・・・いや待てよ、命だけはって事は？』

『鋭いね、曲りなりにも１５０Ｋ超えのトラックと衝突するんだ五体満足と云う訳にはいかないさ。

幸い体が小さく吹き飛ばされた先に緩衝材的な物があった為に奇跡的に命だけは、

と云うのが本来起こるはずだった事態だね』

『じゃあ本来のその子の未来は・・・』

『まぁ、相応の後遺症を抱える事は確かさ』

『で今その子は？』

『君が身を挺して庇ったお陰で、かすり傷一つ無く後遺症も無しと云う所だね』

『そっか……そうですか、良かった』

俺の行動そのものは無駄じゃなかったって事か。

『アレ？…でもそれなら俺は蘇生すれば良いんじゃ？』

『それは流石に無理だね、君の肉体はちょっと説明するのを躊躇(ためら)う程でね、
復元するにしても君の居た世界の基準では不可能と判断されたのさ』

説明を躊躇うってどんだけ酷い状態なんだろう？　逆に気になる…

『…なるほど、でも想定外って？』

『人の死と言うのは死神が決める。
それに従い個人毎に書類が作成される。
で、君の死は本来もっと先の未来での事で今では無かったのさ。
その可能性は０だった…はずなんだけどね』

『…原因は判ったんですか？』

『ああ、実は書類ミスと点検ミスによって修正がされていなかった。
と云うのが判明した』

『え…ちょっ！　書類ミスとか何処の会社だよ！！』

ちょっと待って下さいよ、そりゃ無いでしょ！

『本当に申し訳ない』

そう云って頭を下げてくる。
その姿はとても綺麗で雰囲気も重なって下手に土下座をされるよりも謝罪されている気持ちになった。

『でも書類ミスって…』

『まぁ正直な所、書類ミスはそれなりにあるんだけどね』

『オイオイ…』

『ただ、平均的な寿命を決められた者は数年単位で書類にチェックが入る、
本来ならそこで修正が行われる、はずだったんだけどね。
何故か君の場合ミスが重なって放置されていたと』

『マジかよ……』

流石にショックだ。

『本当にすまない。そう云う体制を創り出した私の責任だ』

そうして再度頭を下げてくる。

『あの一つ良いですか？』

『何かな？』

『今回の件、まさかいい加減にチェックを入れてた、とか悪意をもって放置してた、なんて事はないですよね？』

『それだけは絶対に無い！』

即座に否定してくる。

その雰囲気も真剣そのものである。

『うん、なら良いです、二度とやらなければね。

起きてしまった事は仕方ないし、相応の措置は取ろうとしてくれてるみたいだし』

と俺は唖然とした様子の創造神の方を見る。

『ふむ、しかし驚いたね、そんなにあっさり許しが出るとは思えなかったけれど』

『いや、まぁ俺の中では、神って云う存在は万能ではあれ完璧ではないと思っているからかな』

『何か明確な理由でもあるのかな？』

『それは、神話や伝承とか見てみても、神々って偉業やその功績っ

てのは凄まじいものがあるけど、絶対に失敗をしない訳じゃ無いでしょう？だからさ』

『なるほど…ふふっ、ますます気に入ったよ君の事が』

とそう云って創造神が微笑んでいる。

その笑顔に思わずまた見惚れてしまった。

プロローグ?～転生先と契約～

『大丈夫かい?』

と創造神が俺の目の前で手を振っている。

『はっ!…えっあの気に入るって誰が? 誰を?』

俺の聞き間違いか?

『私が君をだよ♪』

流石に信じられない。

『それで転生の件だけどね』

しかし創造神の雰囲気からして嘘を云っている様には見えないし。
俺なんかの何処が良かったのか謎だけど、これだけの美女に気に入られると云うのは物凄く嬉しい。

『ああ、はい』

『当初君が転生するにあたってある程度の制限を付けようと思っていたんだ。
前例も無い上こちらのミスを楯に無茶な要求をしてくる可能性があったからね』

『取引って奴ですか?』

『そう云う事さ、だけど考えは変わったよ』

『えっ？』

『君が気に入ったと云ったろう。
だから私が出来る範囲で可能な限りの希望を叶え転生させようと思う』

『マジ…ですか？』

『もちろん、ああ後、もう敬語は要らないよ、普通に話して欲しい』

『えっそうです…了解』

『それでまず何処の世界に転生したいのかな？　因みにアニメや漫画の世界でも可能だよ』

『本当に！！　えっじゃあ、魔法少女リリカルなのはの世界とかでも？』

『ああ問題無い。ただ完全にアニメそのままの世界と言う訳でもないよ』

『そうなんだ』

『基本、君が知ってる話の通りに物語りは進むけれど、君と云うイレギュラーが誕生する事、
それにアニメには登場しない人達も当然の様に生きて暮らして居る訳だからね差異というものは出て来るよ』

『なるほどね』

まぁ当然か。アニメじゃ通行人A，Bって人にも実際の名前や人生がある訳だしな。

『なのはの世界を希望したと云う事は原作に介入すると云う事だね？』

『当然！せっかくアニメの世界に転生出来るのに魔法と無関係ってのはちょっとね』

『そうか、ふむ。だとすると…実は1つ条件があるんだ』

と創造神が真面目な顔になり云ってきた。

『条件？』

何だろう？無茶な事じゃないと良いけど。

『実は君を是非使い手にしたいと云う永遠神剣が居てね、その神剣と契約を結んで貰いたいんだ』

『永遠神剣と契約か……』

『ああ』

神剣と契約か…でもだとしたらありがたいな。こっちから転生の際、叶えて貰えてたらって思ってた位だし。

『永遠神剣と契約することに異論はあるかな？』

『全然無いよ！むしろ望むところさ』

『それは良かった♪』

創造神も何やら嬉しそうな感じだ

『それで？　契約するにはどうすれば良いんだ？』

『この場所に見覚えはあるかい？』

そう云われて辺りを見回してみる。

『ああ、そう云えば永遠神剣が眠る『時の迷宮』に似ているなとは思ったけど・・・もしかしてここで？』

『ああそうさ』

『そうか、良しじゃあ契約する神剣は何処に？』

『ああそれはね…』

創造神の顔から笑みが消え真面目な表情に変わる。

『私がその永遠神剣なんだ』

『……何ですと？　…えっ……嘘？』

しかし創造神の雰囲気は変わらない。

『マ・ジ・か…』

『ああ大マジだよ。改めまして、私は永遠神剣、神位：天壌だ』

あまりの展開に俺は言葉を失って立ち尽くしてしまった。

プロローグ?～契約完了そして転生へ～

『……』

『いい加減戻ってきて貰えるかな?』

ハッ！いかん余りに予想外だったから…

『私と契約を結ぶのは不満かい?』

創造神…いや天壌が（´・ω・、）と云う表情をした。

ちょっ！　何この破壊力！！！　うわぁ凄まじい罪悪感が込み上げて来る。

『いやいやいやいやとんでもない！　むしろ是非ともお願いしますって感じだよ！！　本当に！！！』

『そうか、それは何よりだよ。では契約を始めよう♪』

今度は心の底から嬉しそうな表情になる…これも破壊力抜群…落ち着け俺、深呼吸だ。

『……ふぅー。OK、それで俺はどうすれば良いんだ?』

『私に触れて、私との契約の意思を示してくれれば良い、後は自然と言葉が浮かぶさ』

『了解。ん?　そう云えば俺の名前ってどうなるんだ?　契約したら必要になるだろうし』

神剣と契約したら『天壌の～』って付くんだろうしな。

『ああ、そう云えばそうだね。名前だけ決めてもらえるかい？』

『名前だけ？　名字は必要ないと？』

『そうだね、細かく云えば実際に転生をしてそこで決まる、まぁ親次第だね』

『そうか、なるほどな』

どんな名字になるかは生まれてからのお楽しみって所か。
待てよ…下手するとまるで合わない名字と名前何て事も
……まぁあまり気にしないで良いか。
せっかく自分で好きな名前に出来るんだし。

…思案中…

幾つかの候補を考えその中から順位を付けて消去していく。

『良し、双真…双真だ』

『双真かそれじゃ、双真、契約を』

『ああ』

そして俺は天壌に手の平を合わせる形で触れた。
すると天壌の方から指を絡めて来たので握り合う形になった。

…ヤヴァイ…すげードキドキしてきたんですけど…落ち着け俺。
と思っていたが、不思議とすぐに落ち着いて逆に安らかな気持ちになった。
握り合う手から力強く暖かな波動を感じる。
天壌の力に包み込まれている感じだ。

俺は目を閉じる。
そして意識を集中させる。
すると脳裏に自然と言葉が浮かぶ
その言葉を俺は口にする。

『我、剣を取る者。
剣と供にありて
剣と供に歩む者』

俺はゆっくりと正確に、ありったけの意思と想いを込めて声を発した。
そして一瞬自らの魂が溶け出す様な感覚に襲われた。
しかしそれに恐怖や嫌な感じはしなかった。
包み込まれている天壌の力のおかげらしい。

次に天壌が言葉を紡ぎ始める。

『神剣『天壌』は双真を我が主と認めん。
我、汝に神位の力を授けん。
汝、供に悠久の時を刻む者となれ。
天壌の力と輝光の刃その総てを我が主に委ねん』

その言葉と共に巨大な魔法陣が展開される。

そして周囲の空気が変質する。物凄い力の奔流を肌で感じる。
先程の溶け出す様な感覚が強くなり、
その溶け出した所から天壌の力が流れ込んで来るのを感じた。
相変わらず恐怖感や嫌悪感は無い。

『我思う故に汝在り、汝思う故に我は有り』

その言葉と共に自らの存在が創り変わって行くのを強く感じる。
凄まじいまでの力が自らに宿って行くのが手に取るように理解る。
それと同時に天壌の力の扱い方や様々な知識、一部の記憶が流れ込んでくる。
不思議な一体感を感じ、そのまま最後の一言を天壌と共に告げる。

『『我思う故に、我在り』』

……

『…これで契約は完了したよ』

天壌のその言葉に俺は目を開け意識を覚醒させる。

『ふぅ……何か不思議な感じだな。』

俺は手の平や周囲を見渡してみる。

『そう云えば剣は？』

『ああ、試しに握ってみるかい？』

そう云って天壌の姿が消え蒼白い光球に変わる。
なるほど、今までの天壌は神剣の意志、ナルカナ様と同様と云う事か。

『よし…』

蒼白い光球に手を翳す。
そしてその光球が手に吸い込まれると共に俺の手に一振りの剣が現れた。

外見はとてもシンプルで派手な装飾は無く剣と言う形を体現している。
刀身は蒼白く透き通り、剣全体に握りの部分以外は特殊な形をした刻印が刻まれていて
それらが自ら光を放ち神秘的な輝きを纏っている。

『どうだい？』

『こいつは、凄いな』

物凄い存在感と威圧感を放っている。
神位の位は伊達じゃないか。

それからしばらく素振り等をして天壌の力の感触を確かめてから俺は剣を収めた。
すると天壌も元の姿に戻った。

『そうだ。君が私を振るう時には名前の前に天壌の輝刃と付ける事』

『天壌の輝刃？』

『そう、天壌の輝刃ソウマと』

『了解した。つまり
永遠神剣神位：天壌のエターナル、天壌の輝刃ソウマ…って感じか？』

『うん、それで頼むよ。
さて、次は君の能力やデバイスついてだが――『えっ天壌が居るから必要性は無いんじゃ？』

『実はそうもいかなくてね、先程私とリンクしたから判ると思うけど残念ながら普段使いにするには力が強大過ぎる、下手をすれば世界を滅ぼしてしまうしね。』

その言葉に力を確認した時の事を思い返し納得する。

『確かに…常に振るうにはリスクが高いしデメリットも多いか』

『正直私の事は君のバックアップ兼最後の切り札と思ってくれれば良いよ』

『了解。ならデバイスは当然インテリジェントでミッドとベルカのハイブリット更に強化改造スペースもありと、そんな所かな』

『了解だ。ユニゾンは良いのかい？』

『現時点で必要性は感じないしね』

『判った。では次は君自身の能力だけど、どう云う風にするんだい

？』

『そうだな、う～む』
必要なものは何かを考え込む。…決まりだ。

『よしそれじゃ

・リンカーコア魔力値はＥＸ
・霊力（神道力）ＥＸ
・魔術回路１０００個
・身体能力値は総てＥＸ
・エヴォルト《進化》の力
・宇宙（ほし）の本棚
・固有結界：無限の剣製
・黄金律：ＥＸ

と云った感じで』

『ふむ、宇宙（ほし）の本棚と云うのは？』

『ああこれは仮面ライダーＷの地球（ほし）の本棚を元にして、
俺が知っているアニメ・ゲームのスキル、魔法関連全般、アイテムを
扱える様にするためのツールの役割を果たす、
もちろん地球上と言う制限は無くなって有りと有らゆる事象も検索
可能と云う感じでね』

『なるほど、考えたね』

『とまぁ、自分で云ってて何だけど実現可能？』

『問題はないね。可能だよ』

『ほっ、良かった。……普通にチートだしなー』

『確かにそうだね』

と天壌も苦笑する。

『これで転生に必要な条件は揃ったね。何か質問はあるかい？』

『そうだなー』

としばらく思案する俺。

『えーと、質問兼確認かな。転生って０歳から、だよな？』

『ああ、なのはやフェイト達と同い年にと考えてるよ』

『と云う事は…

俺はまず無印でアリシア・テスタロッサを蘇生させようと思ってるんだ。

その場合普通に魔法やスキルを駆使して蘇生させても問題は無いのか？』

『ふむ、そうだね。それは私の権限でどうにか出来るよ。

とは云え死者蘇生を行うのは君自身に相当な負担がかかってしまうね。

どうしたものか……』

と天壌が悩み出した。…しかし天壌ほどの美人度だと悩む姿すら画

になるな～。

『…よし、こちら側でバックアップ、ある程度の手を打っておくよ』

『おおっ、サンキュ！よろしく頼むよ』

そいつは心強いな。

『他には？』

『デバイスって今契約しなくて良いのか？』

『それに関してはコアを準備しておくから、転生後に契約をして欲しい。

私と違ってマスター登録は名字もあった方が良いだろう？』

『それもそうだな。どうせならフルネームの方が良いもんな』

『質問はこれで終わりかな？』

『現時点ではもう無いかな』

『了解、では転生の儀を始めるよ。心の準備は良いかい？』

そう云われて改めて考えてみる。特にやる事は…一つあったな。

『ああ、ＯＫだ。最後に改めてよろしくな天壌』

そう云って握手を求め手を差し出し、自らの心からの笑顔を向ける。

『……』

天壌が虚を突かれた感じになっている。その姿に思わず笑ってしまう。

『むっ酷いな君は、私だって驚く事位はあるさ』

と云ってちょっと怒った顔になる。

あっやべっ！可愛い過ぎる。

天壌は気を取り直すと握手をしようとして俺の手を握って来た！！

それが契約の時と同じ握り方だったので思いっきり照れた。

更に満面の笑顔で

『ああこちらこそ消滅するその時までよろしく♪』

と云ってきた。

ソノエガオハ　ハンソクデス、テンジョウサン…

『ふふっ、さあ改めて始めるよ』

天壌は仕返しが出来て満足そうだ。

ああ敵わないな。

『ああ頼む』

俺を覆う様にして多くの魔法陣が展開される。

そして俺の意識は遠のいていった。

第０章？～転生完了～

！！　…これは水の中か！？

意識が覚醒する。何故か目は開けられないが、
喋ろうとして口の中に水が入って来たので
自分の居る場所が水の中であると確信できた。

口の中に水が入った事で一瞬かなり焦ったものの
酸素の供給源等は判らないが不思議と息苦しさは感じない。

どう云う状況か確認してみる。
意識を集中してみるとどうやら視力だけでなく聴力もイマイチの様だ。

現状得られる情報を総動員して思考する。

―もしかして、０歳児の状態で意識が覚醒したのか？

改めて確認をしてみるとどうやらその様である。

―しかし不自由極まりないな～これは

０歳児では視力も聴力も弱い上、水の中と云う事が重なってか
正確な状況を把握できないのである。

そうしてしばらく思考していると、何故だか眠くなってきた。

その眠気に逆らえず、眠りに落ちてしまう。

そうして短い目覚めと眠りを繰り返ししばらくたった頃、脳内に声が響いて来た。

『・・きて・・か・・？』

何度か繰り返し呼びかけがあり、こちらも意識を集中してみると段々とクリアになってきた。

『・・・起き・・いるかい？』

ああ！！　この声は天壌だ。と認識すると完全にクリアになった？

『おはよう？　無事覚醒出来たかな？』

『ああ、おはよう天壌。久しぶり？　で良いのかな』

『おはよう双真。そして久しぶりだね。
早速で悪いんだけど色々と伝えなければならない事があるんだ』

天壌の雰囲気から、あまり良い話ではない事が感じ取れた。

『良いよ、話して』

『ああ実はね―』

そうして天壌に説明を受ける。整理すると

・この場所は極秘の違法研究施設で自分が今研究用の生体ポットの中に居る事。

・転生が初試みと云う事で想定外の事が幾つかあったと云う事。
・チート能力を付けたは良いがその影響で普通の過程で産まれて来る事は出来ず、
　結果特殊な血筋の遺伝子を組み合わせ生み出された人造魔導師として生を受けた事。
・外見に関して生前と大幅に変わってしまった事。

『なるほどね…まぁ別に外見に関してはどうでも良いんだけど、何で想定外の事態が起きたの？』

『私は創造神であるけれど＝完璧（イコール）、と云うわけではないんだ――』

天壌が云うには
創造に特化した力を持っているだけで完全無欠では無いらしい、
無論、神だけあって様々な事はこなせるもののその分野のスペシャリスト
例えば、人の魂を扱う場合『死神と比べればその力は格段に劣る』との事。

更に天壌が生み出した世界は天壌とは完全に独立していて
仮に天壌が居なくなったとしても問題は無いらしい。
また世界へ干渉をする場合においては創造神と云えども
天壌も好き放題に振舞える訳ではなく
その世界のルールや制限等が在ればある程度の影響を受けざるを得ない。

ふむ、制限と云うとマナ限界みたいな感じなのかもな。

『なるほどね、それなら特に問題は無いと思うよ』

『いや、これだけじゃなくて他にもあるんだ』

『まだあるんだ』

『ああ実は私との契約関連なんだが、今の君はエターナルでは無い状態なんだ』

『Ｗｈａｔ？』

は？　今何と？？

『今の双真はエターナルでは無いと』

『……何でさ？』

『私と契約を結んだ時、君は魂だけの状態だったんだ。
その結果転生後の君の肉体は普通では無いもののエターナルではない形になった』

『えっ！！！　じゃあ天壌との契約は？』

『安心して契約自体はちゃんと結ばれているよ。
契約の証として君の魂に聖なる神名（オリハルコンネーム）を刻むと云う形になったんだ』

『そうなのか』

契約が破棄された訳では無いと知りホッとした。
どうやら先程の世界の制限辺りが絡んだ結果の様だ。

『だけどすまない。君が能力希望の時に不老不死、特に不死性につ

いて触れなかったのはエターナルと云う前提があったからだろう』

『あっ、確かにそうだった』

まいったな。どうしよう…

『一応その辺りは安心して良いと思う、今の君の肉体は再生能力が非常に高い。
更に君が知る回復系の魔法、スキルと合わせれば塵にでもならない限り死なないんじゃないかな』

おお、それなら大丈夫か。
まぁ２０歳辺りまでは普通に成長したいしな～。

『まぁエターナルとなる必要が出た時にまた改めてあの場所で契約を交わせば問題は無いよ』

『なら良かった。他に問題点は？』

『少なくとも成人するまでは私は振るわない方が良いと云う所かな』

『…負担が大き過ぎるって所か』

『その通り、扱えはするけどお奨めはしないね』

『天壌が云ってた通りに最後の切り札って所か…
まぁ冷静に考えてＳｔＳまで使う機会無いんじゃないかなと思ってるしね。
天壌には悪いけど…』

と、せっかく担い手になったと云うのに後１９年は振るう予定は無いと云う事で罪悪感が沸いてきた。
でも天壌の表情等を伺ってみると別段気にした風では無かった…何でさ？

『どうやら気にかけてくれてる様だね。けど私としては何の問題もないさ。
そもそも当初は後数十年は待とうと思ってたくらいだしね。
担い手が居るか居ないかが重要だから』

そう云う事か、天壌も神剣であり俺と契約が出来た時点で満足と。
…と考えていたら急に眠気が―

『すまない天壌、眠くなってきた』

『ああ、念話は負担がかかってしまったかな？
一度眠ると良いよ焦る必要も無いしね』

『サンキュ～・・・お休み』

そして眠りに落ちた。

第0章?〜宇宙の本棚〜

俺は目を覚ました。
今の状態だとどの位の時間が経っているのかが正確には判らない。
とりあえず天壌に向けて――

『おはよう天壌』

と俺は念話を飛ばしてみる。

『やぁ、おはよう双真』

と反応有り。挨拶をして早速本題に入る。

『天壌、俺が眠ってからどれ位経ったんだ?』

『大体3日位だね。そうそう、今の状態だと君に負担がかかるみたいだからね、
早速だが宇宙(ほし)の本棚を使ってごらん』

『えっ、もうスキル使えるの?』

『ああ、宇宙(ほし)の本棚ならね。とは云え制限付きではあるけど、負担は私の方で持つ事が可能だからね』

『おおっ、そうなのか。なら――『さぁ、検索を始めよう』

と意識をを集中させると精神が別の空間にシフトしたのを感じた。
そして辺りを認識してみる。

俺の目の前に一冊のタイトルの無い本が浮かんでいる。
そして周りは無限書庫の様に無数の本と本棚が並んでいる。
これらの本もタイトルは無い様だ。

おおっ！　想像通りの出来だ。
俺は内心でガッツポーズをする。

『ご満足頂けましたか？』

と天壌が姿を現し軽く微笑み語りかけてくる。
相変わらずその姿に見惚れてしまう。

『ナイスな出来だよ天壌。ありがとな』

と俺はお礼を云って、改めて天壌と自分の姿を認識してみる―
アレ？　自分の姿形が判らない！！

『慌てる必要は無いよここは精神体の世界だし、君は０歳児で自分の姿を見ていないんだ認識出来なくて当たり前さ』

その言葉に安心する。

『…と云う事はしばらく検索は不可能なのか？』

疑問が生じたので尋ねてみると。

『検索自体は問題無く行えるよ、それ以外は、そうだね君が４、５歳にならないとまともに扱えないと思うよ』

『なるほどね。とそう云えば天壌ってここに来れるんだな』

『ああ、君との会話が念話だけと云うのも寂しいと想ったからね、少し弄くらせて貰ったよ。
何より転生の結果もあって私の方でも行使出来るようにしたんだ』

おおっ、それは便利だな。

『何にしてもこれからしばらくの間…君が2、3歳位になるまでは私の負担持ちでこのスキルを駆使して能力の掌握、鍛錬を行った方が良いね』

『何でさ？』

『君は違法研究用の実験体と云う事さ』

そう云えばそんな事を云ってたな…ふむ。

『…なるほどな。つまり0歳児の状態での下手な能力の行使は、実験体としては喜ばしい事でも、我が身的には危険度が高いって事か』

『理解が早くて助かるよ。君を解剖してより強力な実験体を、なんてなったら洒落にならないしね』

『確かに…向こうからの実験に対して無難な結果を示すのが最良と云った所か』

アレ？でもこの状況って既にマズイんじゃね？

『なぁ天壌、今の状況ってヤバイんじゃ？』

『そこは安心して良いよ、私の方で君との接触に関して研究者側は一切感知出来ないようにしてあるからね。
せいぜい君が無事に覚醒し期待通り魔力値が高い。と云う程度だね』

ホッ…良かった。
それからしばらく天壌と今後について話し合った。

今後の方針として
・大体４，５歳位までに隙を見てこの研究所を脱出する。
・上記において失敗作として認識された状態に在れば良し。
・向こうからの実験内容次第に寄るが身体能力の鍛錬は後回しにしてまず魔法の知識や戦略の勉強。
・この世界についてと管理局に関しての検索を行う。

大まかにはこんな感じか…あとは状況次第で臨機応変に修正していけば良いだろうし。

『そう云えば俺の両親ってどうなるんだ？』

『その事については、せっかくだから検索してごらん。能力に慣れるためにもね』

『確かに。では検索を開始する。キーワードは…』

――双真の両親――

駄目だな全然減らない。…ならば

――特殊な血筋――

――人造魔導師の元となった遺伝子――

かなり減ったな。

――違法な魔導実験――

ついでに

――実験体の男親、女親――

これでどうだ？

あともう少しと云った所か…う～ん。

そうだ

――転生者――

すると青と赤の２冊だけが残った。

よしっ！　Ｈｉｔ！！

青が男親、赤が女親といった所かな。

そしてまず青い本を手に取ってみると不思議な装丁をしていた

一言で云うと鍵のかかった本の上にもう一冊、薄い本を重ねて一つにした感じになっている。

何だ？　コレ？？

不思議に思いながらも取りあえず最初の方のページをめくって見ると…

・実験体用の特殊な遺伝子元である男性の詳細：不明

・上記男性の生死：不明

と大まかに書かれていた。…マジで！？

そこから先は鍵のかかった部分になったので諦めた。

…これってつまり俺の元になった男親について知るにはキーワードが必須って事か。

ちょっと残念に思いながらも、今度は赤い本を手にする。

こちらは先程と違い俺の知りたい情報が充分書かれていた。

実験体用の特殊な遺伝子元である女性の詳細：

名前：上條咲夜（かみじょうさくや）

年齢：２０歳

来歴：神咲家と交流の深い霊的家柄の一人娘。

　潜在的総霊力、資質が高く神咲より格上である。

その霊力にものを云わせた霊術、技の錬成、
結界の強化や長期間の維持が得意。
咲夜本人は結界術及び他霊能力者の強化を得意とする援護型。

神壌　の隠し名字を持ち、神の子の血筋
または古に神と直接契約を交わしたのでは、と云われている。

神咲　薫が霊障の件で海鳴市に招いた時に、
椎名ゆうひと親友関係になる。

現在は被験体として研究所内に軟禁状態に有り。

父親と違い生存している様なので性格や外見の項目は実際会って見てからと思い飛ばした。
どうやら同じ研究所内に居るようだしすぐにでも会えそうだからな。
と云う事は俺のフルネームは　上條（神壌）双真　となる訳か。
せっかくだし自分についても調べてみるか

『…キーワードは』

――上條双真――

アレ？　全然減らないぞ。何故？？

…そうか、上條双真って云うのは俺が認識してるだけでこの世界に

おいてはまだ違うわけか。

……そうだ！

――上條咲夜の遺伝子――

――人造魔導師実験体――

――違法魔導実験――

どうだ？…おおＨｉｔ！　やったぜ。

本のタイトルは

『Ｐｒｏｊｅｃｔ　ＯＯＯ』

プロジェクト…オーズ？？　ってんなわけあるか！！

と独り突っ込みを入れてから本を開いてみる。

正式名称：Ｐｒｏｊｅｃｔ　Ｏｎｌｙ　Ｏｎｅ　Ｏｖｅｒｔａｋｅｒ

直訳すると、唯一の超越者計画　か。

下手に神とか入ってないのは分を弁えてると云うべきなのかね。

古今東西、神を生み出そうなんて計画は成功しないし。

内容を確認していくと、おや？上條咲夜についての項目があるな。

・新暦〇〇年〇月〇日

研究所のすぐ側に新たな時空の裂け目が観測される、

その裂け目が収まった後に女性を発見する。

女性は部分的な記憶喪失に陥っていたものの
自分の事はある程度判るようで神壌咲夜と名乗る。

神壌咲夜からリンカー・コアとは別種の特殊な力を発見し、
実験用の遺伝子サンプルを採取する。

神壌咲夜は記憶障害の影響もあってか協力的である為、
監禁から軟禁へと待遇を変える。

なるほど、咲夜さんは何らかの原因でこの場所に飛ばされたって事か。
しかし隠し名の方を名乗ったのは記憶障害の影響かな？
まぁ考察は後でも出来るし続きを読むか。

・新暦〇〇年〇月〇日

今までに蒐集した特殊な遺伝子の中から前回とは逆に
リンカー・コアとは関係の無い遺伝子を選び新たな素体を生み出す。

1号体のデータを採取。当然の結果と云えるだろうが、
リンカー・コアを持たない素体が誕生。
これでは意味が無いので破棄が決定。

・新暦〇〇年〇月〇日

前回のデータからリンカー・コアこそ持たなかったものの、
今までの実験素体に比べ様々な面で耐久性に優れている事は判明

した。

その事を踏まえ、過去の実験から得た人工的にリンカー・コアを発生させる
遺伝子プログラムや自己再生能力の強化等、
今まで肉体面の耐性の問題から組み込めなかった
様々なプログラムを組み込み素体を生み出す。

・新暦５６年〇月〇日

成功、リンカー・コアを宿した２号体が生まれる。

無事、意識が覚醒する。

データを採取、魔力値も期待値通り及び
組み込んだ遺伝子プログラムも正常に可動。

以後、この実験体ＺＯ－０２※で研究を進める事が決定する。
※第６次Ｏｖｅｒｔａｋｅｒ－２号体

良し、だいたい判った。

『検索は終ったかい？』

『ああ、今すぐ知りたい事は検索し終えたよ』

『それは良かった。能力の行使に関しても特に問題は無いようだね』

『うん、特に違和感とかは無かったな』

と感触を確かめていると疲労感が襲ってきた。

能力行使に関しては天壌が負担してくれてるはずでは？

『…ふむ、どうやら能力の行使云々に関係なく0歳児では限界があるようだね』

なるほど…と云う事はしばらくは寝たり起きたりを繰り返す事になる訳か。

『そうみたいだな。悪い天壌また眠るよ』

『了解。双真の事や周りの事は見ておくから安心して眠っておくと良い』

『頼むな天壌。じゃあオヤスミ』

『オヤスミ、双真』

そして俺は眠りに就いた。

第０章？～成長と母との出会い～

それから少しの間起きていられる時間の限りで検索を繰り返した。
その間、何度か研究者側から会話によるコンタクトがあったが
俺は『あ～』とか『う～』云って誤魔化した。
それ以外も魔力値の制限をかけたり色々な妨害工作をして必要最低限の結果だけを出していた。
その影響もあったのか
俺が０歳児で居られる時間はとても短かった。
生後半年で３歳児相当の状態になった。
俺が居るこの生体ポッドは育成機の役割も兼ねている様で
あっと云う間に３歳児まで成長させられた訳だ。
「初めましてＺＯ－０２私の事はそうだね～、Ｄｒ．Ωとでも呼んで貰おうかな。
この研究所の最高責任者だ」
「他の研究員に関しては左からα～」
と一通り紹介される。Ωを含め１１人どうやら素性を明かす気は無いようで
それぞれがギリシャ数字から好きなやつを名乗りに使っている様だ。
「初めまして、よろしくお願いします…！？」

と思わず自分のまるで女の子の様な声質に戸惑ってしまう。
…冷静に考えればまだ3歳児、声変わりをしていない訳で
更に天壌から生前と全く違う姿形になったって云われてたっけ。

「どうかしたのかな？」

俺の戸惑いを察したらしい。

「いえ、自分が思うように話せたのに驚いてしまって」

「ふむ、どうやら期待通り知能の面でも優れているようで安心したよ。
今までの結果からどうなるか不安だったが、
冷静に考えれば0歳児の肉体では色々と限界があったね」

とＤｒ．Ωは独り納得していた。

「そうそう、もう一人、協力者でもある彼女を紹介しよう」

とＤｒ．Ωが少し離れた場所に居た女性の方に振り向く。

「君の遺伝子上の母親になる神壌咲夜君だ」

俺の母親にあたる女性の外見は
髪形は腰までである黒髪のロングストレートで
後頭部の辺りに大きな真紅のリボンを付けていた。
顔は美少女と云った感じで２０歳にしては幼く感じる。
可愛らしいと云う言葉が似合う雰囲気だ。

服装は何と云えば良いのか一言で云うと改造巫女服と云った感じの和装である。
服装の影響もあってスタイルに関しては判り難くなって居るがその立ち方や姿勢からバランスの取れたプロポーションをしているみたいだ。
咲夜さんが近づいてきて笑顔で
「初めまして、えーとＺＯ－０２君……う～ん」
とその笑顔が急に曇り何やら悩み始めた。
そしてＤｒ．Ωの方を向き
「あのＤｒ？」
「ん？　何かな？」
「この子って私の子供、少なくとも私は母親って事になるんですよね？」
「…ふむ、まぁそうだね。そう云って差し支えは無いね」
「ならこの子に名前を付けて、私はそっちで呼んでも良いですか？」
「…まぁ特に問題はないかな。君の好きにしたまえ」
「ありがとうございます。それじゃあ…う～～ん……」
とそんなやり取りの後、咲夜さんが真剣な顔をして考え込み始めた。

それからしばらくの間その状態であり時々「０２だから次郎…」とか
「弐でに…？」とか呟きが漏れている。
次郎とか聴こえただけに内心ちょっと不安を感じたが
「…２だし無双とかけて双、と後は真実の真、『まこと』の意味を
込めて…良し！」
とパッと悩み顔から笑顔になり
「決めた！　双真、双真君ににしよう。
よろしくね双真君♪」
「……」
「あっ！　もしかして気に入らなかった？　それなら他のを考え直
すけど―「あっいえ！」」
俺がすぐに反応しない事で良くない意味で捉えた様だ。
この流れで双真と云う名前になる事は薄々感じていたが
双真と云う名に込めた意味が同じだったので驚いてしまったのだ。
なので即座に否定に入った。
「ごめんなさい思ったより良い名前だったので驚いてしまって」
「気に入った？」
と若干不安そうに尋ねてくる。

「ええ、気に入りました。双真でよろしくお願いします」

「はい♪判りました。…でも思ったよりってどう云う事？」

と俺の先程の言葉が気にかかったのかちょっとムッとした表情で聞き返してきた。

「えっ！　あぁ、いや～その…「次郎」とか、「に～」とか聴こえてきたのでそれでちょっと不安になったと云いますか…」

「あぁ～なるほど」

俺の答えに納得したのかうんうんと頷いている。

「流石に次郎は無いなーと自分でも思って却下したわ」

と云って笑い飛ばしていた。

他者に名前を認識して貰った事でこの世界でも双真と云う存在が認識される様になった。

後で天壌に咲夜さんが名前に辿り着いた経緯を聞くと

『いわゆる世界の強制力の一つさ』

と言う判り易い一言が返ってきた。

さて咲夜さんと対面してから2年がたった。

大まかな経緯を説明すると
実験に関しては順調だ、こちら側の思惑通りと言う意味で
現在研究者Ｓｉｄｅは程良く、破棄派と継続派に割れている
簡単に云えば、
予想を上回る結果が出てないからさっさと破棄して新しい実験体を
と言うグループと
予算も無限では無いし、
想定通りの結果は出ているのだから見切りを付けるのは早計だ
と言うグループだ
破棄が４で継続が６割と言う感じだ。
この調子なら何れ当初の目的通り『失敗作』の称号を貰えるだろう
（笑）
咲夜さんについては……一言で云えば抱き付き魔だ…
と云うのは半分冗談だ、と言うのも出会ってから
研究や実験の合間に良く顔を合わせるのだが
その度に隙在らば抱きついて来て撫で回されると言うのが１年近く
続いた。
ただその行動も無意味では無く、彼女が使うある霊術を行使する為
だったのだが

『魂結(たまむすび)』と言う念話の様な霊術である
ただ念話と違うのは一度ラインを繋いでしまえば
盗聴や妨害は一切受けないと云う点か、

難点と言うか弱点は距離に制限があると云う所だろう、
元々この霊術は主に戦闘（戦場）で使用され
連携(コンビネーション)のために開発された術式なので
逆に距離に重きは置かれなかったのである

さて魂結を行った事によって
咲夜さんの様々な考えを知る事になった
まず検索した時に出た記憶障害だが
既にと言うかここに来て数日もしない内に回復したそうだ
そして神壌の性を名乗った意味も判明した。

咲夜さん曰く

『ここが碌でもない場所だと言うのは雰囲気や空気ですぐに判ったの、
だから自分の命の護りここの研究者達の悪意と「戦う」と言う決意と覚悟を固めたから
神壌を名乗ったのよ』

と云う事らしい

そして次に実験体、つまり俺を真人間として育てるために接触出来る様、
協力的な態度を取っていたと云う事。

実際、俺に対しての接触で特別な制限は無い様だしその目論見は成功している。

ただこちらの目的や考えを（転生の事や能力、細かい部分については隠して）話したら
何だか（，・ω・、）ションボリしていたけど。

そうして咲夜さんと協力して研究者達を欺きつつ
今日も自らを鍛え磨く日々を過ごしている。

第０章?～成長と母との出会い～（後書き）

初めまして、作者の兼真と申します。

前回の投稿より１年が経過してしまいましたが
更新が止まっていた理由としては
年末に向けて家庭の事情で忙しかったと言うのがあり
投稿はせずちょこちょこ書いていた（Ｗｏｒｄ等で）のですが
ぶっちゃけ大震災でデータが消えました。

ただ『書いていた分だけが消えた』とかならまだ良かったのですが
大元のいわゆる『ネタ帳』と云える様々な過去の閃きの詰まったデータが
ＨＤＤと共にお亡くなりになったので、超絶望しましたｏｒｚ

消えた後すぐ必死に思い出そうとしてみたもののやはり一部しか思い出せず
書く気力も失せてしまったのが原因です。

この一年でどうにかこの作品に使うネタや大まかなプロットも
ある程度思い出したり新たに追加したりしたので、
丁度一年の今日をきっかけにまた書き始めようと思い立った次第です。

当初のものとはやはり違うものになるとは思いますが
頑張っていくのでよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7853n/

魔法少女リリカルなのは - The Spirit of Eternity Sword -

2011年11月16日09時42分発行